

スーパー・メジャーズと中国：中国石油 3 社との対比（8）

エイジウム研究所 上席研究員 木村 徹

この連載の第 6 回に「中国の石油 3 社の中で、国際的な石油取引量を曲りなりにも継続的に公表しているのは CNPC だけである。」と書いた。しかし、石油取引に関する統計、その他の情報の公開度については、“スーパー・メジャーズ” も大きなことは言えない。

ExxonMobil、Chevron および ConocoPhillips

まず、ExxonMobil は、少なくとも同社の Annual Report や Financial & Operating Review を見る限り、Exxon と Mobil が合併して今の会社ができた 1999 年以降、原油の販売量、購入量とも公表していない。それだけではなく、上記の文書やホームページで、同社の事業内容を説明している個所（例えばホームページの “What we do”）でも、石油取引についての記述は何も見出せない。

ただし、ホームページにある同社イギリス関連会社による “Supply and Trading” 部門の人材募集欄に、採用された人材が担当する原油取引の規模は 250 万 b/d である、と記載されている¹。もっとも、ここで採用される人材はイギリス南部のレザーランド（Leatherhead）に配置されるようであるから、250 万 b/d はこの取引拠点における取り扱い数量のみを示しているのかもしれない。仮にそうであるとすると、他の取引拠点における取引量も考慮に入れた場合には、ExxonMobil 全体の取引量はその 2~3 倍に上るのではないかと推測される。

“スーパー・メジャーズ” は石油取引を数カ所で行なっている。例えば、Shell で原油取引を担当しているのは Shell International Trading and Shipping Co. Ltd. の Crude Oil Trading 部門であるが、取引の主な拠点は、ヒューストン、ロンドン、デュバイ、ロッテルダム、シンガポール、ロシアなどにある²。

次に、Chevron は 2001 年 10 月に Chevron と Texaco が合併して今日に至っている。同社は 2002 年初め、合併後に存在していた “Global Trading” と “Fuel and Marine Marketing” の両事業部門を “Global Supply and Trading” という 1 つの指揮系統の下に置くことになった。

¹ “Requirements: Supply and Trading” (http://www.exxonmobil.com/UK-English/HR/Jobs/UK_HR_sandt.asp)

² Shell の Annual Report (2007) および “Crude Oil trading” (同社のホームページ：<http://www.shell.com/home/content/trading-en/aboutshell/crudeoiltradingandsupply/cot.html>) による。

その時、”Global Trading” には、“International Crude”、“North America Crude”、“International Products” および “Risk Management” の 4 つの小部門が置かれており、これらでは、原油と石油製品を合わせて 600 万 b/d 以上が取引されていた³。

その後、組織上の多少の改編を経て、2008 年現在、原油取引は ”Supply & Trading” 部門によって行なわれている⁴。しかし、上記の記述があった後は、同社の Annual Report Supplement、その他の文書などに取引数量は見られない。

さらに、ConocoPhillips は “Commercial” という事業部門で石油取引を行なっている、と見られる。ただし、同社の諸文書、ホームページなどのこの部門に関する説明は、極めて抽象的なものに止まっている。

BP および Shell

以上に述べたアメリカ籍の 3 社に比べると、ヨーロッパ籍の 3 社は石油取引に関する情報の公開度が高い。もっとも、3 社の公開度には差があり、以下に見る通り、公開度が最も高いのは Total である。

BP の原油販売量は、このところ 211 万 b/d (2006 年)、189 万 b/d (2007 年)、170 万 b/d (2008 年) と低下してきている。最近の 10 年間では、1999 年の 498 万 b/d が最大であり、しかも、この数字は現在のような原油取引が広く行なわれるようになった 1980 年代以降でも最大である。

一方、原油購入量は 2002 年以降、発表されていない。2001 年における原油購入量は 608 万 b/d であり、1980 年代以降、最大である。因みに、1999 年と 2000 年には、原油の販売量と購入量の合計は 1,000 万 b/d を超えていた⁵。

Shell は、2006 年分まで原油販売量を発表していた。同社の原油販売量は、最近 10 年間では、2004 年の 516 万 b/d が最大であり、しかも、これは 1980 年代以降の期間でも最大である。原油販売量は、傾向的には 2001~04 年あたりを頂上として低下している。

また、同社の原油購入量は 1996 年以降、発表されていない。同社の原油購入量は 1993~95 年には 518~557 万 b/d と、上述の BP の最大値 (1999 年に 500 万 b/d 弱) よりも大き

³ ChevronTexaco の Annual Report Supplement 2002 (47 ページ) による。

⁴ Chevron の Annual Report Supplement 2008 (48 ページ) による。

⁵ 以上は、BP の "Annual Report and Accounts" および "Financial and Operating Information" (各号) による。

かった。しかし、この期間における Shell の原油の販売量と購入量の合計は 880～960 万 b/d で、上述の BP の 1,000b/d 以上には及ばない⁶。

原油取引量を殆ど毎年、発表している Total

Total は 1950 年代以来、殆ど毎年、原油の販売量と購入量を発表している。最近 10 年について見ると、いずれの年も、同社の原油の販売量、購入量はともにその生産量を大きく上回っている。原油の取引量（販売量と購入量）は 1999 年の 312 万 b/d から 2000 年には 562 万 b/d へ上昇して、2005 年まで 500 万 b/d 台を維持した後、400 万 b/d 台へ低下している（表 1）。

表 1. Total の原油の生産量、処理量、購入量および販売量（1999～2008 年）

（単位：1,000b/d）

| | 1999 | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 原油生産量 | 718 | 1,433 | 1,454 | 1,589 | 1,661 | 1,695 | 1,615 | 1,473 | 1,502 | 1,365 |
| 原油処理量 | 1,553 | 2,411 | 2,465 | 2,349 | 2,481 | 2,496 | 2,410 | 2,252 | 2,201 | 2,133 |
| 原油購入量(A) | 1,956 | 3,197 | 3,126 | 3,059 | 3,105 | 3,034 | 2,850 | 2,639 | 2,692 | 2,474 |
| 原油販売量(B) | 1,168 | 2,426 | 2,391 | 2,587 | 2,548 | 2,593 | 2,354 | 2,038 | 2,141 | 1,844 |
| 原油取引量(A+B) | 3,124 | 5,623 | 5,517 | 5,646 | 5,653 | 5,627 | 5,204 | 4,677 | 4,833 | 4,318 |

（出所）Total の “Fact Book”（各号）

Total では、“Trading & Shipping” 部門が原油、石油製品および関連 “derivatives” を取り扱っており、原油と製品を合わせた取引量は 2008 年に約 500 万 b/d であり、2006、07 年とほぼ同じ水準であった⁷。なお、この記述から推定すると、2008 年における製品の取引量は 60～70 万 b/d ということになる。

Total の 2008 年における原油取引量（431 万 8,000b/d）は、前回までに述べた中国の石油会社の取引量をかなり大きく上回っている。CNPC の取引量は年 7,500～8,000 万トン、Sinopec のそれは同じく 1 億 2,500 万トンと推定されており、それぞれ 150～180 万 b/d、250 万 b/d に相当する。これらの数字によれば、CNPC の取引量は Total の半分以下、Sinopec のそれは Total の 6 割弱に過ぎない。なお、他の “スーパー・メジャーズ” の多くの取引量は Total のそれと同じ程度か、より大きい、と推測されることにも留意する必要がある。

しかも、前々回に述べた通り、“スーパー・メジャーズ” はその原油生産子会社が生産する原油を、同じ親会社に属する精製部門に売る代わりに、最も好い条件を提示する第 3 者

⁶ Shell の “Financial and Operational Information”（各号）、その他による。

⁷ “Flexible, secure supply,” May 14, 2009（Total のホームページ：

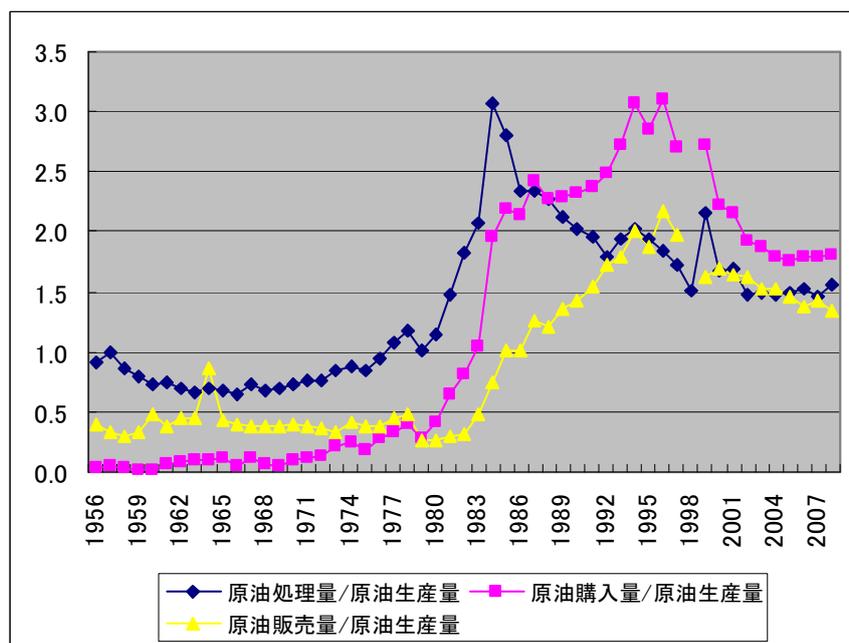
http://www.total.com/en/group/activities/downstream/trading_shipping_829.htm）による。

に売る、というような方法で利益を得ようとしているのに対して、中国の石油会社はまだその域に達してはいない。

ただし、Total の諸資料にも、直接的な利益獲得を目的として取引されている原油の量は明示されていない。多少ではあるが手掛かりになるとすれば、次の数字であろう。同社の 1999 年における原油購入量は、表 1 に示した通り、195 万 6,000b/d であったが、その内訳は、期間契約によるものが 75 万 2,000b/d、市場での購入分が 120 万 400b/d であった⁸。

原油取引の歴史的な推移

ところで、BP、Shell および Total に関して上に数字を示したように、“スーパー・メジャー”が大量の原油取引を行なうようになったのが 1980 年代以降であることについては、すでに触れた。図 1 は、数字の揃っている Total について、原油の生産量を基準として、取引量の推移を示したものである。



(出所) Total の “Fact Book” (各号)

図 1. Total の原油購入量および販売量に対する生産量 (1956～2008)

この図によって、原油の販売量/生産量および購入量/生産量の比を辿ってみると、1950～60 年代から現在までの期間を、①1970 年代初め頃まで、②1970 年代末頃まで、③1980 年代半ば過ぎ頃まで、④1990 年代半ば頃まで、さらに、⑤現在まで、の 5 つの時期に分ける

⁸ Total の “Fact Book (1999)”、59 ページによる。

ことができるようである。

①は、“スーパー・メジャーズ”の前身であった当時のメジャーズたちが、「垂直統合 (vertical integration)」の下で、原則的には自ら生産した原油を自ら処理（精製）していた時期である（図 1 は、Total の場合は原油生産量がその処理量を上回っていたことを示している）。

②は、いわゆる OPEC 石油攻勢によって、そのような“幸福な”時代が終わり始めた時期であり、③は、彼らが自社（持分）原油を大きく失った時期である。そこでは、彼らの原油生産量は処理量の一部を賄うに過ぎなくなり、残りの穴を大きく埋めたのは、産油国からの原油購入（「バイバック」契約による）だった。

同時に、彼らが大量の石油取引を行なうようになったのは、この時期のことである。彼らは、1980 年代前半あるいは半ば頃から、生産量を上回る量の原油を販売し、かつ購入するようになった。Total による原油の購入が生産を上回るのは 1983 年であり、販売が生産を上回るのは 1985 年である。

なお、このような動向の背景や条件について詳しく説明することは、紙幅の制約により難しいので、この欄に 2008 年 8 月に掲載した「スーパー・メジャーズと中国：シェル（下の 2）」を参照して下さいれば、幸いです。

(終わり)